

## 271. 平成9年度滋賀県下における 発掘調査の紹介(その3)

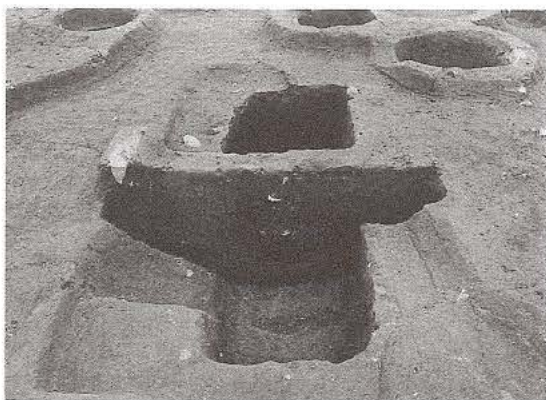
### 16. 上出A遺跡(山本川地点)の発掘調査 安土町中屋<sup>かみで</sup> 上出A遺跡

滋賀県安土町大字中屋に所在する上出A遺跡は、織山から続く丘陵と周囲に点在する独立丘陵に囲まれた平野の北端に位置する。

調査はかんがい排水路(山本川)の改修に伴うもので、調査面積約4,000㎡について発掘調査を実施した。今回の調査では縄文時代早期から鎌倉時代までの遺構・遺物が検出された。そのなかで縄文時代晩期末・弥生時代前期後葉とみられる墓域では10基の土器棺墓と12基の木棺墓が確認された。

土器棺墓は土塚に深鉢や壺を横位ないし斜位に置き、土器片で蓋をするタイプと土器片を箱状に組み合わせるタイプなどが確認され、棺に使用された土器には、長原並行期の深鉢のほか、水神平式土器など東海系の突帯文土器の深鉢や条痕文土器の壺も認められた。

木棺墓は棺材こそ残っていなかったものの、土塚底面に小口穴や側板を設置する溝状の掘り込みが検出され、規模から大小2種類に分けられた。大型のタイプでは長さ約1.6m、幅約0.7m、深さ約0.3mの土塚に、長さ1.4m、幅0.5m前後の木棺痕跡が確認され、小型のタイプでは長さ0.95m、幅0.75m、深さ0.16mの土



3号 木棺墓

塚に、長さ約0.6m、約幅0.5mの木棺痕跡が確認された。木棺墓は土塚底面の小口・側板痕跡により、小口穴のみもつタイプと浅い板痕跡(小口・側板の痕跡)が4周に巡るタイプ、深い小口穴と浅い側板痕の溝をもつタイプの3タイプに分けられた。

木棺墓からはまったく副葬品が出土しなかったため、時期の決定が難しいが、縄文時代晩期末頃の土器が置かれた土塚が木棺直上に造られていることと、埋土に第I様式新段階の土器片が混じる例があることから、おおむね長原並行期(縄文時代晩期末)~弥生時代前期後葉に造られたものと考えられる。このことから、弥生時代に墓の主流となる木棺をもつ墓が弥生時代への過渡期にすでに出現していたことが明らかとなった。

(財滋賀県文化財保護協会 北原 治)

### 17. 搦手道<sup>からめてみち</sup>下半・主郭北面の発掘調査 安土町・能登川町 特別史跡安土城跡

特別史跡安土城跡の実態をより明らかにするため、平成9年度は搦手道下半(城内主要路確認調査)、主郭北面(城内主要遺構確認調査)を対象として発掘調査を実施した。いずれの調査も遺構の有無と残存状況の確認を目的とし、搦手道についてはとくにルート・規模・構造の解明に重点をおいた。

調査の結果、搦手道は、山腹部で道幅が約2.4m~約3m(8~10尺)と狭く、所々に側溝を伴いながら、約15m~約35mごとに屈曲することが判明した。その一方、山裾部では直線的に延びる道中央に水路を通し、幅約3.9m(13尺)の広い路面には踏石を置かず、緩やかなスロープであることがわかった。この山裾部には伝蔵屋敷跡があり、それに隣接する搦手道がこうした構造をとることは、たとえば荷車を用いた物資の大量運搬等に対応したものとも考えることもできる。

主郭北面の調査では、主として以下の5点が明らかとなった。第1点は本丸北東隅で門礎石を検出したことと、本丸へ至るには黒金門經由、本丸裏門經由、本丸北東虎口經由の3ルートがあることがわかった。第2点は主郭北虎口から八角平への通路についてである。この通路は今回検出した礎石と石墨・伝台所跡北柵形等との関連から、高層の上屋構造を伴うと考えられる。第3点は伝台所跡におけるカマド等の炊事関係遺構の検出であり、第4点は八角平への通路途中から伝長谷



川邸跡への通路の検出である。第5点は天主に葺かれたとみられる甃・鬼瓦等や飾り金具などの遺物が出土したことである。

今回得られたこうした調査成果は、天主など主郭部の構造解明へ手掛かりであるとともに、安土城が近世城郭の先駆であることを示すと考えられる。

(滋賀県安土城郭調査研究所 北村圭弘)

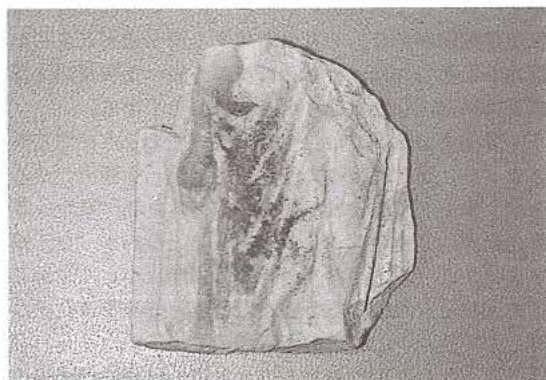


搦手道・伝蔵屋敷跡虎口

18. 白鳳期の大型多尊埴仏が出土  
能登川町佐野 町史跡法堂寺遺跡

法堂寺遺跡(廃寺)は、JR能登川駅より東方約700mの住宅街に位置している。塔心礎(高さ1.5m)が現存し、古くから瓦や土器が採集されており、また、周辺に残る神崎郡条里の地割りと異なる正方位の地割りをしていることから、白鳳時代の寺院跡と推定され、昭和47年に町の史跡に指定された。

今回の調査は、史跡整備事業に先立つもので、平成8年度から実施している。調査では、昨年度検出された掘立柱建物(雑舎)の他に、塔・金堂・中門の跡、礎石立建物や区画溝、瓦溜まりなどが検出された。また、古墳時代の住居跡や掘立柱建物、弥生時代後期の河跡なども検出された。伽藍配置は大官大寺式に類似



大型多尊埴仏片

する特異な伽藍配置である。

遺物は、金堂の北側や中門の南西部の瓦溜まりなどから鴟尾や軒瓦など、多量の瓦類が出土した。特に出土した軒瓦の文様は、全国的にも類例のない、特異なものが多く、当地方に多い湖東式といわれる渡来人の影響を受けたものや、中央の技術を直接受け入れたものでなく、非常に地方色の濃いものである。

また、中門の南西部の瓦溜まりから、大量の瓦類とともに大型多尊埴仏の破片(写真)が発見された。破片は、脇侍(勢至菩薩)の腰から膝の部分で、法隆寺(奈良県)に伝来している「重要文化財・磚製阿弥陀如来及脇侍像」と同型式のものであるが、踏み返しをされたものと思われる。また、表面の一部に漆の痕跡が確認されており、金箔がされていたと考えられる。

今回発見された大型多尊埴仏は法隆寺の他、大和の中小豪族の建立による寺院や夏見廃寺(三重県)など出土例は非常に少なく、これらの寺院との間で造営氏族あるいは僧侶などが何らかの交流があったことが考えられ、軒瓦の文様形態とあわせて、造営氏族の性格を考える上で大変貴重な資料である。

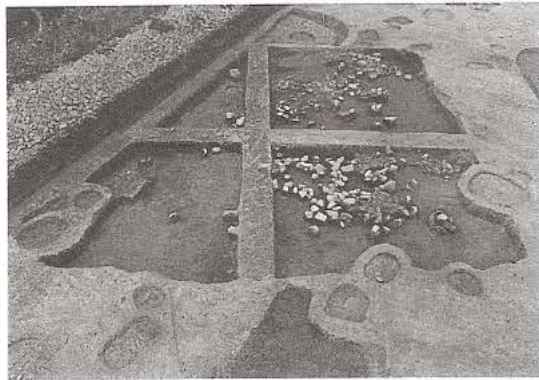
(能登川町教育委員会 杉浦隆支)

19. 古墳時代の竪穴住居から  
多量の高坏が出土

能登川町佐野 斗西遺跡

斗西遺跡は、能登川町大字佐野から神郷にかけて所在する遺跡である。この付近は、愛知川の左岸に位置し、その自然堤防となっており、中沢遺跡とともに県下でも有数な複合遺跡である。斗西遺跡は、弥生時代から平安時代にかけて形成された遺跡で、特に弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、祭祀遺構・遺物等に特筆すべきものがある。

今回の調査は、個人住宅建設に先立ち平成9年6月から8月まで実施したもので、調査面積は約700㎡であ



多量の高坏が出土した竪穴住居



る。

調査の結果、遺構は水田耕土直下で検出され、弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴住居12棟、掘立柱建物1棟等が確認された。竪穴住居12棟の中1棟から多量の高坏が出土し、遺物から4世紀後半のものであることが判明した。このような住居内からの高坏の多量出土は、同遺跡内の同時期の住居跡からも検出されており、遺構の性格を考えるうえで貴重な資料となるであろう。

(能登川町教育委員会 西 邦和)

### 20. 安孫子北遺跡 (III) 発掘調査 兼 兼倉時代 安孫子北遺跡

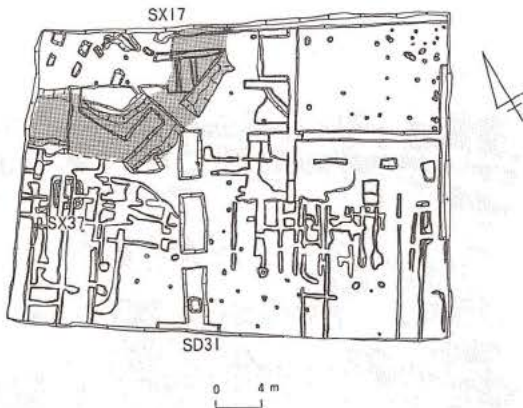
安孫子北遺跡は、湖東平野の北東部に位置する。当遺跡は、これまでの調査で縄文晩期から室町時代にかけての遺構・遺物が検出され、主に鎌倉時代の集落跡として知られている。

今回の第3次調査は、民間の店舗造成工事に先立って平成9年10月から平成10年1月にかけて実施し、調査面積は約1,500㎡である。

調査の結果、大きく分けて古墳時代前期と鎌倉時代、室町時代の3つの時代の遺跡を確認した。まず古墳時代前期には、SD-01・02・08、SX-17がある。SD-01・02は、東西方向に軸をもち東から西へ流れていたようである。SX-17は、弥生時代後期までにおさまった自然流路上に造られている。溝の南側の一辺が約13mで、幅が約4.5m、最も深い部分で約0.8mを測る。

SD-31は、鎌倉時代の溝である。幅が約2.0m、最も深い部分で約1.0m。遺物は、常滑焼甕、土師器皿などが出土している。この溝は、これまでの第1・2次調査で検出された鎌倉時代の建物跡群を含む集落の東限を区画するものと考えたい。

室町時代の遺構としては、SX-10・11がある。土坑中央には石が敷かれており、長径が約3.0m、短径約



A調査区遺構平面図

2.75m、最深部で約0.2mを測る。同時期の遺構は他には検出されず単独で存在していることから、中世墓と考えられる。時期的には、北側に隣接する安孫子城跡に併行する。明応6年(1497)に安孫子氏の安孫子右馬允が秦荘町軽野神社神殿再興奉行であったことが同神社棟札の銘文からわかっており、15~16世紀に勢力を広げていたようである。また、SD-31から出土した瓦片も安孫子城に関係するものと考えられる。

(秦荘町教育委員会 竹村吉史)

### 21. 京極氏家臣団の館跡の調査 伊吹町上平寺 上平寺南館遺跡

今回の調査は中山間地域総合整備事業伊吹山南麓地区工事に伴う発掘調査である。

伊吹町上平寺地先に位置する上平寺南館遺跡は、室町時代の館跡として周知されており、隣接する上平寺城遺跡・上平寺館遺跡とセットで捉えられるものと考えられている。上平寺城遺跡は、以前から使用されていた城館を高瀬の代に整備した京極氏の居城として知られ、城下が営まれたのは京極政経・材宗との抗争に終止符を打った永正2年(1505)から、浅見氏らの国人一揆によって高瀬が退けられ上平寺が焼かれた大永3年(1523)迄と考えられている。調査地付近の台地上には土塁をもった曲輪跡が認められ、近世の比較的早い段階で作成されたと思われる上平寺付近の絵図(伊吹町所蔵)に、「駒繁・若宮・加州・浅見・黒田・多賀・西野」などの地名が記されていることから、京極氏重臣の屋敷群が想定されていた。

調査面積は約2,620㎡であり、T1~T7まで7つの調査区を設定した。残念ながら今回の調査は曲輪の中心部分の発掘調査ではないため、建物跡などの遺構は検出されていない。検出された遺構としては、土塁や堀切を兼ねた石敷きの道(3~5cm程の小石が幅約1.2~1.5mにわたって敷き詰められる。)などが主なものである。土塁は、断ち割って土層観察を行った結果、



土塁の検出状況



最初に低い土塁を構築し（16世紀前半頃と思われる）、その後再び盛土して高い土塁を構築したものと考えられる。石敷きの道については、殆ど遺物が出土しておらず、今のところ時期の推定は困難である。

遺物は、土塁の盛土などから検出された土師皿が殆どであるが、天目や摺鉢などの破片も出土している。

尚、本稿執筆時点でまだ調査は継続中であるが、上平寺付近は、中世の景観を良好にとどめており、本調査はそれを裏付けるものとなった。

（財滋賀県文化財保護協会 稲葉隆宣）

## 22. 柿田廃寺の瓦が出土

ひがしこうさか きた  
長浜市 東上坂町 柿田遺跡

柿田遺跡は長浜市東上坂町に所在する遺跡で、県史跡の茶臼山古墳の西方に位置し、集落跡・寺院跡として周知されている。東上坂周辺には柿田廃寺という白鳳期の寺院が存在したと伝えられているが、寺域の範囲や建立時期などの詳細は全く不明で、過去の調査でも獣面文軒丸瓦をはじめとする瓦数点が出土しているだけである。建立時期もこの遺物をもとに推定されており、柿田廃寺は7世紀末～8世紀初頭に建立されたものとされてきた。しかし、平成9年度の調査において、柿田廃寺の全容解明の手掛かりとなり得る新たな成果が得られた。

平成9年度に柿田遺跡で行った調査は東上坂地区圃場整備事業の排水路設置に伴うもので、調査対象地区は約405㎡。このうち約30㎡について平成9年10月3日から10月31日まで調査を行った。調査の結果明確な遺構は検出されなかったが、包含層から遺物収納箱90箱以上にも及ぶ膨大な量の白鳳瓦が出土したのである。平瓦が大半を占めるが丸瓦・軒丸瓦なども見ついている。軒丸瓦は単弁八葉蓮華文・複弁八葉蓮華文軒丸瓦の2種。破片を含めて10点程度出土している。

長浜市内では、柿田廃寺で見つかったものと同じ系統の軒丸瓦が新庄馬場廃寺・大東廃寺でも見つかって

いる。しかし、これら2つの寺院跡から出土したものと比較すると今回出土した軒丸瓦はさらに時期が遡ることから、柿田廃寺は長浜市内において最初に建立された白鳳寺院であったと言えるだろう。建立時期は7世紀の中頃から後半と考えられる。今回の調査では寺域を特定するような遺構は検出できなかったが、今後の調査に期待したい。

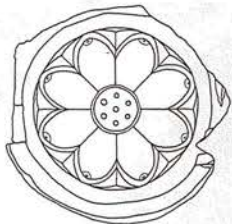
（長浜市教育委員会 池嶋陽一）

## 23. 全国3例目の中世厩舎遺構を検出

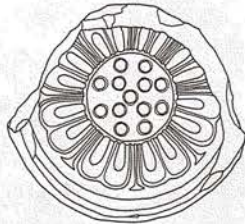
しもさかなかまち  
長浜市 下坂中町 下坂中町遺跡

下坂中町遺跡は、長浜市南部に位置し、五井石川を北に、下坂氏館跡を西に、北東には大戌亥遺跡と、鴨田遺跡が位置する。遺跡の中心時期は、14世紀であり、位置的、時代的に下坂氏の支配を受けた集落の可能性が考えられる。

遺跡は、堀で囲まれた集落であり、13世紀中頃から16世紀中頃まで存続し、近世には島地となった。集落の最盛期は14世紀であり、この時代の遺構として、区画の堀、堀の内外に打ち込まれた杭列、また、西側の堀は溜め池状の施設を備え、地形的、土層的観察から南より取水し、北の五井石川方面に排水を行っていたことがわかった。水量の調整は堀に打ち込まれた杭列によって、せきとめられて、一定量を超すと流れていたとみられる。そしてコ字形の、内堀に囲まれた、掘立柱建物を1棟検出し、東西2間×4間以上の大型建物となり、内堀と建物内の溝より、囀蹄類ウシ科と奇蹄類ウマ科、ヒトの足跡がまとめて検出された。溝と、堀内の埋土は黒カッ色土であり、他の遺構埋土とは明らかに違うため、ウシ、ウマのし尿および糞と考えられ肥料を取るための溝として機能が考えられた。以上の事から、ウシとウマの世話をした厩舎遺構とみられ、過去の類例では神奈川県上浜田遺跡から検出された2例の厩舎遺構が、中世では確実視されるもので、それにつぐ重要な検出例となった。また、集落の北東方向の鬼門には、境界祭祀の痕跡として、甕と土師皿が埋納されていた。



単弁八葉蓮華文軒丸瓦



複弁八葉蓮華文軒丸瓦

0 5 10 (cm)

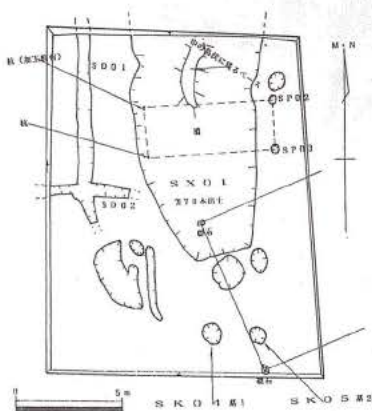


集落を区画する堀



この調査の成果は報告書として、近日刊行される。  
(長浜市教育委員会 西原雄大)

## 24. 中世寺院祭祀遺構(修景)を検出 長浜市神照町 神照寺坊遺跡



遺構平面図

神照寺坊遺跡は、長浜市北部に位置した寺院跡で、9世紀に宇多天皇の勅願により、神照寺が建立され、中世においては、南北朝の争乱に巻き込まれ、観応の擾乱の舞台ともなった。しかし、織田信長の近江侵略においては、浅井方に付いていたため、姉川合戦が発生した元亀年間において、信長による破壊を受けた。その後、秀吉の保護により、ようやく近世初頭期において復興することとなる。

今回の調査では、調査地が現在の神照寺の南隣であり、字名も蓮乗坊であることから、寺院や僧院等の遺構の検出が考えられた。しかし、検出した遺構は、楕円形の池で、南北11m、東西8m、深度0.2~0.3mであり、池の南端付近では、東西に池を横切る橋と考えられる4本の杭が検出された。東岸側2本と池中に打ち込まれた西側の2本であり、池中のものは2本共、部材が良好に残存しており、多角形をしていたことから、建築部材の転用のようである。また、池中の遺物は70本を超える箸、14世紀代の灰釉碗、土師器皿、モモ、クルミ等の種子であることから、洗い場、投棄のための池とも思われたが、遺構の南隣から2基の同時期の蔵骨器と板塔婆を伴う墓を検出したので、それらの遺構とは、考えにくく、池状の祭祀遺構としてとらえることとした。すなわち、楕円形状の池に東西方向の橋がかけられ、南面には墓が位置していることから、橋上の僧侶が、墓に向かって法要を行ったのではなかろうか。中世の「一遍上人絵伝」の中には、このような池をテーマとした修景というものが2例ある。修景とすれば、これまでその存在は幻であったので重要な発見と言えよう。

(長浜市教育委員会 西原雄大)

## 25. 中世集落跡を検出

長浜市南高田町 東高田遺跡

東高田遺跡は、中世から現代に至る複合遺跡である。土地区画整理事業に伴い、昨年は約2,000㎡、今年度は約554㎡を調査した。調査地は、中世の土豪・高田氏館跡に隣接する「大上軍」地区である。

検出された遺構は、昭和20年代頃と考えられるゴミ捨場、近世の水田、11~14世紀と考えられる掘立柱建物・柵列・井戸・池・水路・区画溝などである。現代のゴミ捨場からはランプ・漆器・下駄・火鉢などが出土した。近世の水田跡は、現況の地割とほぼ一致していた。注目すべきは中世の遺構群である。

東高田遺跡の中には高田氏館跡が存在する。高田氏は、その出自は明らかでないが、室町時代にはその存在が知られている。秀吉とのかかわりも深く、館跡内には、秀吉から賜ったと言われる土地もある。今回検出された掘立柱建物跡や区画溝は、11~14世紀のもので高田氏と関連づけるには無理があるかもしれないが「大上軍」・「杉戸」という字名や、高田氏の鎮守・高田神社に隣接するなど、興味深いものがある。高田氏が、いつから南高田を本拠地として活動を始めたのかを探る手がかりとなる遺跡である。平成10年度も調査が予定されており、高田氏との関連が明らかにされることを期待したい。

また、昨年度の調査区ではあるが、旧河道が検出され、弥生前期から古墳後期までの遺物が出土している。  
(長浜市教育委員会 丸山雄二)



14世紀の区画溝(南から)

## 26. 中世の水田跡から牛の足跡を検出

長浜市山階町 野瀬遺跡

野瀬遺跡は、北陸自動車道長浜インターチェンジの西側に広がる遺跡である。古墳時代から平安時代にかけての集落跡として周知されてきたが、近年調査が進み、縄文時代中期後半から中世、近世にいたる複合遺跡であることがわかってきている。現在、発見されて



いる遺構は、区画溝やピット、すき溝などがある。

今回の調査は、対象面積約35,000㎡の内、試掘調査の結果から道路幅及び店舗用地になる2,000㎡について調査を実施した。道路幅部分については、柱穴、土坑、近世の水田跡が発見されている。柱穴には、14世紀前半の灰釉陶器や土師器が出土している。規模は、判明しないが掘立柱建物跡と考えられ、伝承の口分田古殿城との関係を結ぶ資料となっている。

店舗用地部分については、13世紀後半から14世紀前半の水田跡が発見されている。鋤と唐鋤の溝が重複している地域が多くあり、約300条のすき溝が確認されている。また、大人・子供・牛・鹿などの足跡が200個が発見されている。大人と牛の足跡は、ほとんどが農作業の時につけられたもので、すき溝の外側で多く発見され、溝の中からも牛の足跡が発見されている。

子供を背負いながら農作業をしていたのか、子供の足跡も確認されている。年齢を調べる計算方法があり、測定してみると2～3才ぐらいになる。また、牛の足跡の分布状況を調べると6か所に集中している。このデータから水田の規模や耕作方向が、ある程度推定することができる。今回の調査では、当遺跡の南側に広大な水田地帯が確認されたことと、牛の足跡が多く発見され、農作業がどのように行われていたのか、中世の農業史を考えるうえで貴重な発見となった。

(長浜市教育委員会 伊藤 潔)



牛の足跡とすき溝(南より)



調査区4 遺構検出状況(南より)

を設定し実施した。調査の結果、弥生時代中期前半～平安時代の包含層、古墳時代終末期の小竪穴式石室1基、弥生時代中期後半～後期の竪穴住居を計21棟検出した。調査区4のSH-6は、直径約12m、面積約113㎡あり、県下で最大級の竪穴住居である。建築部材が焼け落ちた状態で出土していることから火災をうけた住居と考えられる。SH-6内には、同心円状に3条の周壁溝が確認されている。またこの地点では、竪穴住居が7棟重複して検出された。出土遺物から、弥生時代中期後半から後期にかけて建て替えや拡張が行われていたものと考えられ、首長層の成長ぶりがうかがえる。出土遺物については、中期前半～後期にかけての多数の土器と石鏃5点、鉄鏃2点、緑色凝灰岩の剥片が2点出土した。今回の発掘調査や土器の散布状況から大規模な集落が営まれていたことが推定できる。復元される集落の面積は、約6万㎡(6ha)で県内で最大の高地性集落と考えられる。また出土土器から弥生時代中期前半・中期後半～後期にかけて集落が営まれていたと思われ、その規模や内容から湖西地域における拠点的な集落であったと考えられる。湖西地域は、若狭・北陸など日本海岸地域と畿内を結ぶ交通の要衝であり、当遺跡は、交流の拠点の集落であったと思われる。県内では、湖西地域を中心としていくつかの高地性集落が確認されている。今後、県内の高地性集落を考える上で総合的な比較検討が必要である。

(新旭町教育委員会 横井川博之)

## 27. 湖西地域の拠点的な高地性集落 新旭町熊野本 熊野本遺跡

熊野本遺跡は、饗庭野台地の縁辺部、標高140～150m、比高差約40mの台形状の丘陵に所在している。丘陵の縁辺部は、断層により急崖状になっている。昭和40年代に県教委により行われた分布調査で、弥生時代中期後半～後期にかけての土器が採取されており、この地域に高地性集落が存在することが推定されていた。発掘調査は、個人の住宅建設工事に伴い、調査区1～8